定年退職される先生方のメッセージ

輝ける未来に向かって

長年にわたり教育・研究にご尽力をいただき、ことし専大のキャンパスを去る定年退職の先生方は8人。専大での思い出や学生へのメッセージをいただいた。

文学部教授　青山　高義

マニュアルに頼らず考える

東日本大震災、隕石の落下など天変地異が続き、地球が激しく活発に生きていることを、思い知らされる今日このごろです。

一方、福島第1原発のメルトダウンやお隣の中国が起源とされるPM2・5の増加など、かつて衝撃的な惨事として遠くから見ていたチェルノブイリ事故や、論文などで読んでいた欧米の越境する大気汚染などが、まさに目の前で起こっているのです。科学の限界を示すものですし、人間の学習能力の無さを示すものでしょう。

これらのことは科学的とされる話を頭から信じてはいけないこと、権威づけられた政策やマニュアルに頼ってはいけないことなどを教えてくれます。

学生の皆さんは、急速に変わる世の中を少しでも良い方向に向けるため、今まで以上に自分の頭で科学的に考えることが求められているのです。

在職21年。主な担当は「気候環境学」

文学部教授　奥原　宇

将来の姿から今を見つめて

41年間の大学教員生活の言ってみれば仕上げの14年間を専修大学で過ごしたことになります。仕上げることができたかは、はなはだ心許ないのですが、専修大学の皆さんとはいい時を過ごせたと喜んでいます。

近年の学生諸君は、ことあるごとに学力低下だとか、幼児化とか、世間から悪態をつかれて育ってきた感がありますが、そんなことを気にする必要はありません。昔から大学生はそのように言われ続けてきたのですから。

ただ時々、先走って将来の世の中やそこでの自身の姿を思い浮かべ、そこから現在を振り返って見るということをやってみるといいかもしれません。それが惰性で暮らすことを修正してくれたり、今やるべきことの指針を与えてくれたりすることがあるでしょう。

専修大学と、私と共に専修を去る皆さんの将来が開けることを祈念しています。

在職14年。主な担当は「イギリス文学の世界」

文学部教授　太田　順三

力いっぱい生き抜く勇気を

歴史は「現在から過去への問いかけである」という。「混迷の時代」といわれる現代も、人間の働きかけの結果の可能性を含め、1世紀の後には、社会の有様に一定の評価が定まる。

日本「中世」が何処に始まるか。諸説ある。長年関心を寄せた荘園史研究に立てば、10世紀の荘園・公領制の展開に始まる。社会の基層では、律令公民の系譜を引く有力農民が「諸方兼作田堵」と呼ばれる公領の出作や墾田の請作を通じ、耕作権を強め、名主化する。彼ら名も無き民衆の活発な活動が、荘園領主との間に身分関係を結んで基本民を形成することに注目したい。

明日という「未来」に向け、「現在」に力いっぱい竿さし生き抜く勇気は「過去」の時代と社会に孜孜として生きた民衆の実相を発見し、そのひたぶるに生きた姿に触れることからも湧き出よう。

同じく今学窓を去り行こうとする諸君の前途が、幸多きものであることを切に祈りたい。

在職28年7カ月。担当は「古文書学概論」

ネットワーク情報学部教授　齋藤　雄志

知識に関する3つの見かた

30年後に学生の皆さんは、大学で学んだことをどう評価するのであろうか。おそらくさまざまな人がいるであろう。中には否定的な人もいることは承知しているが、それは仕事と知識のマッチングにかかわる運命のほかに、その知識にかかわる姿勢も関係している。私は次のように考えている。

第1に些細な知識も含め、すべての知識は一生のうちにはなんらかの場面で役に立つ可能性が高い。それが実は重要な場面かもしれない。第2には知識を集め、活用するためには背景として多様な知識が必要である。知識が知識を結びつける。第3には分析、評価、判断、知識創造が行える知識・見識・経験などが重要である。

大学4年間で学べることはきわめて限られているが、大学生活の中の自由な行動とさまざまな学習や訓練を経て、これらの知識にかかわる3つの見方に扉を開くことが大学の役目と私は考えている。そのような中で自分の考え方に合う新しい世界が開かれるかもしれません。

在職28年。主な担当は「環境と情報」

ネットワーク情報学部教授　佐藤　創

大学は卒業後が肝心

大学で学んだことは役に立つと心得よ。

卒業後大いに苦労をして成功した人が「そんなもの、ほとんど役に立たない」という言葉を口にすることがあります。それは「直接的には役に立たない」という意味であり、一種の「自信の表明」なのです。「自分で身につけた知識や技術でなければ役立てることはできない」という真実を述べているのです。

学ぶとは真似ること、その中で何を体得できるか。それは学ぶ側の問題です。入学さえすれば何とかなると受け身で考えていたら、何ともなりません。過剰な期待も極端な否定も誤りです。大学の特性を冷静に見据え、卒業後に自ら得るものを引き出すことが肝心です。

苦労してもうまくいかない人が同じ言葉を口にする場合、大学に多くを期待しすぎたと言えます。大学が将来を保証してくれるものではありません。職業のためだけに大学を考えたのではないと思い直して、さらなる精進を続けて下さい。

すべての卒業生に幸いあれ。

在職38年。主な担当は「情報理論」

人間科学部教授　乾　吉佑

あきらめない生き方求めて

学生の皆さんが進もうとする人生は、楽しみや喜びに満ちています。しかし、その一方、躓き、転び、倒れるのもまた人生です。この中で私たちは自分の生きざまを見いだしていくのだと思います。悲しみや悔やみに直面する時に、その人の真価が問われるとも言われています。

人生ではさまざまな悲しみに出会います。それは幸福や喜びに寄り添うように密かに忍び込んできます。中でも近親者の死や愛するものの喪失、失職など、日ごろ慣れ親しんだ対象を失った時、私たちはその悲しみにどう耐えるのか、人間にとって永遠の課題だと思います。

この課題を16年間、臨床心理学の講義で学生の皆さんと共に考えてきました。それは単に知識ではなく、生きていくための知恵として、そして人生にあきらめない生き方を求めるためでした。

皆さんに感謝し、そして私もあきらめない生き方を求めていきたいと念じています。

在職16年。主な担当は「臨床心理学」

メッセージをいただいた6人のほか、次の2人の先生も定年退職されます

中島　巖　経済学部教授

在職35年。主な担当は「リスクの経済学」

根間　弘海　経営学部教授

在職27年。主な担当は「英語」